★食通に評判の有馬グランドホテルのしゃぶしゃぶ

有馬温泉の中の坊、有馬グランドホテル内にある、「ふる里」では最高級の神戸肉を使った、しゃぶしゃぶが大好評。近くにゴルフ場が多いことから、ゴルフ帰りのお客様が多い。それに、ここのマスターがゴルフ好きで、話題に事欠かず楽しい雰囲気で、一段と味わいも増す。タレはマル秘の独特なもので、季節により珍しい野菜・山菜のつけ合せがいい。

この他にスッポン料理やぼたん鍋もやっているが、これらは予約が必要。

美味そうな神戸肉

竹の風味が楽しめる「ささ酒」が風情をそえてくれる。しゃぶしゃぶの後は、梅ぞうすいで仕上げるのがいい。

しゃぶしゃぶ3500円。梅ぞうすい350円。ささ酒一本900円。神戸市北区有馬町808。有馬グランドホテル内ふる里

★ヤッホーと呼んでみよう

工芸作家の畑マス子さんが、元町文化学院の陶芸教室で一番弟子だった神河和子さんと共同経営でスナックを始めた。誰でも覚えやすいようにと〝ヤッホー〟

皿類、箸置き、コースターは二人の手作りの焼き物で、メニューでは〝ヤッホー焼き〟が好評だ。

文化人やらいろんな人が集まってカラオケ大会、畑さん、神河さんも陽気に唄う。賑やかな、それでいて寛ぎの雰囲気があるユニークな店として昨年七月オープン以来、人気が高い。

畑マス子さん

神河和子さん

■生田区中山手通2丁目109（トアロード、川北病院南、東へ入る）
☎331－3536　5：30PM～12：00AM

★気さくなお店です

テンポイント

最近の競馬ブームはすごいばかり。ファンでなくても、あの名馬テンポイントのことは誰でも知っている馬が大好きというママがあの名馬にあやかって〝テンポイント〟という店を、昨年11月に三宮でオープンした。開店以来、名馬よろしく快調な走りぶり。まだ第一コーナーを廻ったばかりだが、「気さくで、明るくって手ごろなお値段」ということで、大変な評判。

ファンならママと競馬談義をしながら杯を重ねるとよい。

カラオケもあり、歌って良し、飲んで良しの神戸の新しい溜り場になりそうだ

生田区加納町4丁目パレ北野坂4F
☎332－2624

左端が馬好きのママ

●神戸うまいもんとドリンキング

BARおるごーる

生田区下山手通2丁目7－1
KSMビル6F
☎392－3680

おなじみのプチおるごーるの姉妹店として、KSMビルの6階に「BARおるごーる」が昨年に月にオープンした。

カルチェ色で統一された店内は、ルイ王朝風のシックで、落ちついた高級ムード。しかし、意外と値段は安く、気軽に楽しめる店。

ちょっとした料理があったり、ママをはじめ、女の子たちのおしゃべりのさわやかさが受けている。一度のぞいてみて下さい。多分とりこになるでしょう。

〈姉妹店〉
プチおるごーる／KSMビル2F☎332－2680

シックなカルチェ色のBAR

ポケットジャーナル

★充実した内容だった 25周年記念二紀展

今年で25回目を迎える神戸二紀展の25周年記念展が2月中旬、兵庫県民アートギャラリーと、さんちか広場で開かれたが、16日夜、各賞受賞者表彰式と出品者懇親会が、兵庫県民会館にて行われた。

表彰式も和やかだった

会は中西勝二紀会兵庫県支部長のあいさつで始まり表彰式に移った。

＜受賞者＞田村孝之介賞・渡辺照定（東灘区）県知事大賞・松下元夫（長田区）神戸市長大賞・知念正文（北区）神戸新聞大賞・谷口和市（灘区）えびら賞・犬童徹（東灘区）80年優秀賞・高崎研一郎（垂水区）さんちか15周年記念賞・伊藤悦子（垂水区）羽多悦子（葺合区）元町画廊賞・上西良一（北区）神戸青年会議所賞・西田洋一郎（宝塚市）神戸六甲ライオンズクラブ賞・松田隆利（西宮市）以上。公募の部は省略。

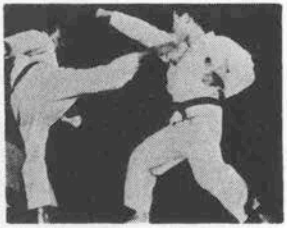
その後、来賓のあいさつが続いたが、「25周年記念展は例年にない活気があった」（赤根和生さん）「不思議に思うほど熱気があった」（佐藤廉さん）などと口々に今回の記念展の充実を称え、懇親会に移った。

★空手！ 兵庫県本部が創立25周年

（社）日本空手協会兵庫県本部が、昨年で創立25周年を迎え、4月27日、記念空手道大会を開き、神戸文化中ホールで試合と演武、生田神社会館でパーティを行なう。

同本部は、昭和27年より松濤館空手道研究会として空手道に励み、昭和29年8月15日、兵庫県本部として発足した。その後幾多の変遷を経て、今や兵庫県下の学校、職域団体に深く普及発展してきた。

大会は、同協会の代表選手を招致して盛大な空手道の祭典となる模様で、開会前には生田神社で神前奉告祭をとり行ない、指導のあった岡崎真一、阪本勝、原口忠次郎、小国豊、飛田昌久各氏の遺徳を顕彰する。



最近は女性にも人気の高い空手

日本空手協会兵庫県本部創立25周年記念空手道大会／4月27日（日）

「神前奉告祭」10時　生田神社

「試合と演武」2時　神戸文化中ホール　2500円

「記念パーティ」6時　生田神社会館　5000円

★劇団どろ15周年おめでとう！

旗上げ公演「僕らが歌をうたうとき」以来の働くものの演劇グループ、劇団どろが今年で創立15周年を迎える。昨年より「ブレヒト連続上演」と称してブレヒトの作品に取り組んでいる「この15年の歩みを土台に80年代に向かってさらに大きく集団的に飛躍したい」と劇団員一同意欲満々。

誕生日ありがとう運動

十五周年ご支援感謝!!

誕生日

すべての人に、年に一度必ずめぐってくる記念すべき日です。

この記念の日はみなさんが、自分がこの世で多くの力や多くの人々によって、生かされているありがたさを感謝されるでしょう。その生かされている感謝の気持を、社会に目を広げ、ちえおくれの問題を他人ごととしないでわがこととして考えてください。

こういう発想のもとに生まれたのが「誕生日ありがとう運動」です。この運動が、わたしたちの町神戸市長田区室内小学校の障害児学級の担任たちによって提唱されて、運動がスタートしたのが、昭和四十年五月八日でした。この五月八日で満十五年を迎えます。

そこで、この運動では、次のような十五周年記念行事を行ないます。

A十五周年記念冊子の発行

この運動の十五年の歩みと今後の展望や課題をまとめます。特にこの運動を支える全国各地の多数のボランティアの執筆で編集されているのが、ひとつの特長です。

B十五周年記念展示会

五月八日(木)～五月十三日(火)

インフォメーションとうべ

1十五年の歩みの写真展示

2ちえおくれの問題を中心にした福祉関係図書の展示

十五周年記念行事を成功させるために、みなさんのご協力をおねがいいたします。

誕生日ありがとう運動本部

651 神戸市葺合区御幸通八―一―六

神戸国際会館一階の郵便局の隣

電話二五一―八一六一内三一六

記念公演は秋に予定されており、機関紙も発行。神戸に根づく演劇活動に期待したい。

劇団どろの公演

5月公演／ブレヒト連続上演
NO・4「処置」
劇団どろ／神戸市兵庫区大開通4―7―4 ☎576―6488

★大丸前歩行者天国にストリート・バンド出現

神戸デキシーランドジャズクラブ（KDJC）の第11回例会は、4月27日（日）午後2時から元町の神戸ヤマハ5階ホールで開かれるが、KDJCでは、広くジャズを楽しんでもらいたいと、例会に先だち1時から大丸前歩行者天国にストリート・バンドを繰り出すことを企画。ストリート・バンドとは、かつて本場ニューオリンズでみられた演奏スタイルで、ジャズの発祥はこれ。リバーサイド・ランブラーズと、キャッスルジャズバンドの2つのアマチュアグループが演奏することになっているが、2時からの例会に出演する他の演奏者が加わるというハプニングが起こりそう。

リバーサイド・ランブラーズ

そして引き続き開かれる例会には、ブラジルから25年ぶりに帰国中の右近雅夫さんが出演する予定。右近さんは幻のトランペッターとも呼ばれ、日本のアマチュア・デキシー界に測り知れない貢献をした人。

またKDJCでは、昨年12月に開いた例会の模様をLP化し、4月25日に限定発売する。このLP「デキシーランドジャズ・パーティ」には、ニューオリンズ・ラスカルズやリバーサイド・ランブラーズの他、薗田憲一とデキシーキングスが参加。KDJCのLP制作第一弾で、ジャケットデザインはバンジョー奏者でもあるサントリーデザイン室長の大森重志さんが担当。二千円。

また15回目を迎える全日本デキシーランドジャズ・フェスティバル、今回は5月25日（日）武庫川学院甲子園会館〈元甲子園ホテル〉で開催される。

★受け手の空間造型

山口牧生展

牧生さんはこういった。

「今、人々は自己主張をして、飛び出そう飛びだそうとしている。僕は人が話しかけるものを受けとめる作品、つまりポジティブでないネガティブな受け身のものを創りたかった。現代の人々が持っている悩みや哀しみを吸いとり紙のように取ってくれる彫刻を」と。

山口牧生展より

定時制の武庫川高校を27年、夙川短大で3年教壇に立ち、並行していた作家活動からこの程一本立ち脱サラ初の個展が2月25日～3月8日まで元町画廊で開かれた。現代彫刻の石の造型では第一線の作家である山口牧生さんの、石を愛する心が作品のいずれにも浸透している。何も語らない石に、語りかけたくなる石。石の心を知り、ひかえて相手を生す、忘れられた日本

美術ガイド

★県立近代美術館
開館10周年記念・ミレー、コロー展／4／19～5／18

★西宮大谷記念美術館
第五回絵本原画展／3／2～4／13
鹿児島寿蔵の世界「紙塑人形」展／4／26～5／25

★KCCアート・ギャラリー
播磨工芸作家五人展〈茶道具を中心として〉／4／2～4／15
越前焼陶芸展／4／17～4／30

★KCCギャラリー
大手前女子大美術部卒展／4／12～4／18
土の仲間陶芸グループ展／4／19～4／25
松井香瑤日本画教室展／4／26～5／2

★キタノサーカス
アメリカの新しい写真の動向展／4／5～4／17

★CITTY GALLERY
麌嘱版画展／3／15～4／20
文承根個展／4／7～4／20

★東門画廊
本田耕平個展／4／1～4／6
梶原忠司個展／4／8～4／13
山田節子個展／4／22～5／4
寺川隆個展／4／27～5／4

★あじさい画廊
武田勢子個展／4／4～4／9
大橋良三個展／4／15～5／20

★芦屋ギャルリーりべるて
カシニョール版画展／4／29～5／10

★そごう神戸店美術画廊
米倉斉加年絵本原画展／4／4～4／9
第6回現代洋画習作展／4／11～4／16
林英仁茶陶展／4／18～4／23
納健個展／4／25～4／30

★大丸神戸展美術画廊
山本大慈日本画新作展／3／4～4／8
島津俊則洋画新作展／4／17～4／22
桜井祐一、舟越保武、北村春福彫塑三人展／4／24～4／29

★三越神戸店美術画廊
八7F大催会場〈東山魁夷唐招提寺障壁画展／4／24～5／6
本橋富美夫日本画展／4／8～4／13
ポール・ギャマン、メルサード、ベルベ三人展／4／15～4／27

人本来の空間造型をとり戻した作家ともいえる。

★大森一樹監督、期待の新作をATGで撮る

数々の賞に輝いた「もう頬づえはつかない」で話題のATGの80年度の新作「ヒポクラテスたち」を大森一樹さんが撮る「ヒポクラテスたち」は医学生の青春を題材にした大森さん自作の脚本で、主演に元キャンディーズの伊藤蘭を起用して5月中旬よりクランクインする。ロケ地は京都と東京。「大まじめの映画です」と語る大森さんも医者の卵で、「自分の特技まるだしで頑張ります」と意気込みも新ただ。さてどんな映画を作ってくれるか楽しみなことだ。ヒポクラテスとは医学の聖のことである。

大森一樹監督

★「勇者に翼ありて」発刊

「私が猿木君の生きざまを書きたい衝動に駆られたのは、彼に真の勇者の姿を見たからだ」と著者の草鹿宏氏は語っている。

主人公の猿木唯資君は、関学アメリカンフットボール部の名QBとして大活躍していた。が、2年前試合中に事故に会い、重度の身体障害者になった話は多くの人が知るところである。

車椅子人生の中で、昨年関学を卒業し、簿記学校へ通い自立の道を歩み始めた周囲の愛情に守られ、苦難と戦う姿が描かれている。

＜一光社刊・¥900＞

「勇者に翼ありて」

★青春の汗と涙を一冊に

「淡水ラグビー倶楽部」（岡部誠一会長）が創立50周年を迎えたが、それを記念して「神戸高商・神戸商大ラグビー部五十年史」が刊行された（A4判306頁）

神戸のスポーツ界を知る上で興味深い一冊といえる

花時計

ポートピア'81を明日につなげよう

去る三月十五日（土）神戸博―ポートピア'81の総合起工式がテーマ館の建設予定地で盛大に行われた。

つまり、主催団体であるポートアイランド博覧会協会（兵庫県・神戸市・神戸商工会議所・神戸新聞社）関係者、海外・国内のパビリオン出展者の代表者など八〇〇人の人が出席、ポートピア'81の開幕まであと一年という時点で、成功を祈っての式典が行われた。

主催者代表として宮崎辰雄会長（神戸市長）は「海外及び国内の理解と協力で万国博に次ぐ、大規模な博覧会になる。博覧会のテーマである『新しい海上文化都市の創造』といいては関西経済の復権という二つの大きな目標を達成したい」と挨拶した。確かに沖縄海洋博をしのぐ規模であり、中国の天津からパンダ使節の派遣も決まって意気高からかである。しかし、大阪の万博の時も沖縄博の時もそうであるが、折角の博覧会が明日につながらなかった憾みがある。

この大規模な博覧会をどう明日につなげることが出来るのかが、博覧会の成否の答えであって、それは、あと一年間の工夫にかかる重大事でもあると思われる。＜Y＞

●KOBE POST

★作家の**邦光史郎**、**田中阿里子**夫妻が、京都、真如堂の北隣りへ転居されました。新住所は〒606京都市左京区浄土寺真如町一の十三☎（〇七五）七五二―〇一八一

★パリで活躍中の画家**郷相和**氏が**山田秀子**さんと4月中旬帰国され元町画廊で〝郷相和展〟を開催する予定です。

★神戸新聞学芸部の新部長に、**三木康弘**氏が、新次長にはディリーより**富依幸三**氏が着任。**中平邦夫**氏は論説委員に栄転されました。

★第7回いけばなインターナショナル（16ケ国参加）神戸支部花展が4月3日～5日相楽園会館で開かれます。神戸支部会長／**グラック・スミ**花展委員長／**渡海充子**

★KKウィンザー（**山田六郎**社長／モデリスト・**山田富紗子**夫人）が、4月23日創立25周年を迎えてオリエンタルホテルで祝賀パーティが開かれます。

★クリエティブディレクター、コピーライターの**山崎臣平**氏が、本社を神戸に移転されました。〒651神戸市葺合区八幡通4丁目2番5号トキビル2F（市役所前）☎（〇七八）二三二―一九〇〇サン企画KK

★カメラマンの**春田佳章**さんが、永年の官舎生活にサヨナラして下沢通の新居に移り、2階を住いに1階を歌好きの**孝子夫人**がスナック〝マキ〟をオープン。楽しく唄える店です。〒652神戸市兵庫区下沢通4丁目5―19（風見鶏第1フラワー館2階203号☎（〇七八）五七七―六四一一）

★アートフラワーの**山下桃彩**さん（桃彩会）の神戸教室が4月1日より移転。センタープラザ西館6F11室／神戸市生田区三宮町1ノ17ノ4☎（〇七八）三九一―〇八〇〇

★神戸日建の設計室デザイナーの**井ノ内一夫**さんと**靖子**さんが3月20日ご結婚。おめでとう。

神戸百店会だより

★優しくノンシャランな リザ春夏コレクション

春に先がけた2月24日、センタープラザ3階のリザ・サロン神戸本店が、〝'80ヨーロピアン春夏コレクション〟を開催。今年の趣向は、同じ神戸に本社を持つ田崎真珠と仲良くタイアップして、ファッションとジュエリーの出会いを、二回のショーで展開。共に本もの志向のファッションハーモニーを見せて好評だった。

リザの作品傾向はソフトなパステルカラーで天然素材を活かした女っぽいものが多く、ビルダジュール、ルイザディグレジー、ポーシャルの高級プレタを約三十点紹介。田崎真珠もパールやジュエリーをさりげなくコーディネイト。

リザサロンの5周年にふさわしい、とても優しく神戸らしいショーだった。

真珠との出合い。リザのショー

★'80春サノへ キャピタルフェア

元町一番街のヌーベル・サノへでお待ちかね'80春のキャピタルフェアが、三月七日と八日の二日間にわたって午後1時と3時30分二回ずつ開かれた。

今回の出品ブランドは、NEATTIAS などの作品一七四点で内容的には'80～'81への秋冬もの。このショーのサンプル商品をお客が予約発注するというおなじみの趣向。

ブラウスとセーター、カーディガンスーツ、ツーピース、ワンピース、コート、イヴニングトレスや、ブルゾンなど多彩に、しかもサノへらしいセレクトで、都関氏のアナウンスも落ちついて、ファミリーな雰囲気のサロンショーだった。

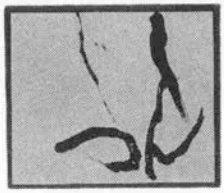
サノへはもう秋の気配

★淡州堂が「書と陶芸」展

センタープラザ西館2Fの陶芸専門店淡州堂が4月8日から13日まで、同じくセンタープラザ東館2Fのギャラリーあじさいで、書と陶芸展を開く。

書はかなの出口草露さんのかけ軸、色紙、短冊で陶器は京焼き木村盛伸さんのもの。食器を中心として「センタープラザに移ってからこれが第1回目」と藤原有社長もはりきっている。

淡州堂／☎331－8758


神戸在住出口草露さんの書より「しんじつ」

●ショップトピックス

★生田区西町にスヌーピーの石像があるのをご存知ですか。さあ、その重さを当てましょう―のキャッチフレーズで**ファミリア**がスヌーピーのぬいぐるみが当たるクイズを開催しています。3月20日～4月6日まで元町本店、センター街店、さんちか店、大丸、そごうの各コーナーにある応募用紙に申し込んで下さい。発表は4月19日、各店頭で。

★4月10日、元町3丁目の**風月堂**ホールでもとまち寄席「恋雅亭」があります。出演は桂米朝、林家染二他。席料千円、6時半より。

★フランス料理レストラン**北野クラブ**ではご婦人のためにキタノクインズランチをご用意しました。4月のメニューは魚のテリーヌ、ポテトスープ、若鶏のソテーバスク風、グリーンサラダ、キウイとアイスクリームのメルバ風、コーヒーにプティフール。税サ込みで3000円です。親しいお友だちとお喋りを楽しみながらいかがでしょうか。（予約。☎231－2251担当坂本まで）

★京町筋にある**ナショナルショールーム**では入学、入社シーズンのプレゼント好適品を多数品揃えしています。色もカラフルでとにかく便利なものばかり、ぜひ一度お出かけください。☎391－7746

★お祝い事の多い春、**オリエンタルホテル**特別メニュー「乾杯」をお勧めします。ステーキのコースで税・サ込1万円。記念にご利用のお客様にお食事中のカラー写真をその場で写してプレゼント。4月30日まで。オリエンタルホテル スカイレストラン ☎331－8111 六甲オリエンタルホテル スカイレストラン☎891－0333、オリエンタルホテル地階にあるバー「マーメイド」では4月1日～28日の期間、ウィスキーまつりを実施。バランタイン、スーパーニッカが6千円より。

■第4回神戸文学賞受賞作品■

溶ける闇

高木敏克

絵／木村光佑

4

〈恋〉を売っている店から三十メートル程歩くと、大きな〈世界〉という看板が見えてくる。黒い髪の少女に聞くと、そこに入るには完全武装が必要だということだ。マシンガンや手榴弾に身を固めた客たちが、二十メートル程助走して、ガラス戸をぶち破りながら店内に突入するそうだ。だが、今までにその店から〈世界〉を買って帰った者は一人もおらず、〈世界〉がはたしてどのようなものであるのか、知る人もいない。それどころか、この店からは無事帰還することすら不可能に近い。なぜなら、〈世界〉を買いに入った客に店の主人が売りつけるのは憎しみばかりだからだ。そのため、客どうしが殺し合い、最後に残った一人の客の頭は、店主の振りおろす大きな斧が真っ二つに叩き割るということだ。だから、この店に入る客はめったになく、内部の様子は、たまたま幸運にも並木の蔭のカフェテラスでそれを見たと言う酔っ払いの話に頼るしかないが、外から見ると真暗な店内も、客が入った時には火花が飛び、火炎と硝煙が上がり、血飛沫とともに、ちぎれた衣服や指の先が、歩道にまで飛び出してくるそうだ。

〈世界〉を売っている店の向かい側に〈文字〉を売っている店がある。それは一見すると普通の書籍店のように見えるが、一風変わっている。店先は壁のように高く積み上げられた埃だらけの書籍類にうずもれていて、入口がなかなか見付からない。それもそのはず、入口の扉は豪華本の皮表紙を模して作られている。そのドアは、誰にでも簡単に開くことができるが、一枚目のドアを開くと、次から次に重なった薄いドアが現われて、それには、おびただしい量の文字が刻みこまれている。客は、その文字を声を出して読まなければならない。というのも、その声を内部から店主が聞いていて、読み終らないと一枚ずつの扉の鍵を開かないのだ。次から次に読み終り、最後に再び重く堅い皮張りの扉を開くと、店の内部はまるで書斎のようだ、店の中央、一段と高くなった床の上には、寝台ほどもある両袖の机がどっしりと固定され、店主はそれに両肘をついて新しい客の顔をにらみつけるのだ。だが、彼の坐っている椅子があまりにも低すぎるのか、彼の体は机の横にまわらないとほとんど見えない。彼が腰掛けている物体が、墓場から堀り出された柩にちがいないと、ぼくが判断するのは、その長い六面体の側面には、何やら人の名前が刻みこまれており、その上に附着した腐った枯葉や土が、それを読みづらくしているからだ。棺桶に坐った店主はミイラのように痩せこけていて、皮肉な目付の上で眉を寄せ、おもむろに、〈それで、君は扉の文字を全部読んだのか。〉と聞いた。〈ええ、全部読みました。〉〈それはまた何のために。〉〈ぼくには、数か国語が完全に読めるという自信があり、まず第一にその自身を試したいという気持のためと、もう一つは、ぼくはまだ若くて、今のうちは旅行ばかりしていますが、そのうち仕事をもたなければならないとしたら、小説家にでもなってみようかと思うからです。〉〈それはまた立派な志だが、もしそうだとすると、わしは君には何も売る訳にはいかないね。この店は、文字を愛する、わが最良の読者のために開かれた店だからだ。彼らは文字を愛し、作家を無条件で尊敬している。読者の文学に対する愛情の深さは、作家や詩人以上だ。なぜなら、彼らは文字を読むことしか知らないからだ。だが、ものを書く人間はちがう。彼は文字を読む以上に事実を読んでしまう。書くことは、いわば事実を読むことだ。そうすると、いきおい文字を憎みだすというものだ。もの書きは言葉を憎みながら言葉を書く。だから次から次に新しい文字を書いてゆくのだ。いわば、それは以前に書いた言葉に対する憎しみの念からだ。そういう不幸な状態になると、本を恋人のように抱きしめて眠ることなど不可能で、毎夜血みどろになって言葉と格闘し、眠ったところで夜中に文字に叩き起こされ、死んでも死に切れぬ無念のために、このわしのように棺桶を破

って出てこなければならないはめになる。そして、今思うのだが、もの書きにとっての一番の幸福というのは、自分の読者だけを愛し、決して他のもの書きと接触しないことだ。だから、わしは、もの書きになりたいなどという若僧とは会いたくないね。とっとと出てゆきたまえ、そして、事実を読みたまえ。ランブラスを歩けば、何でも読めてくる。〉

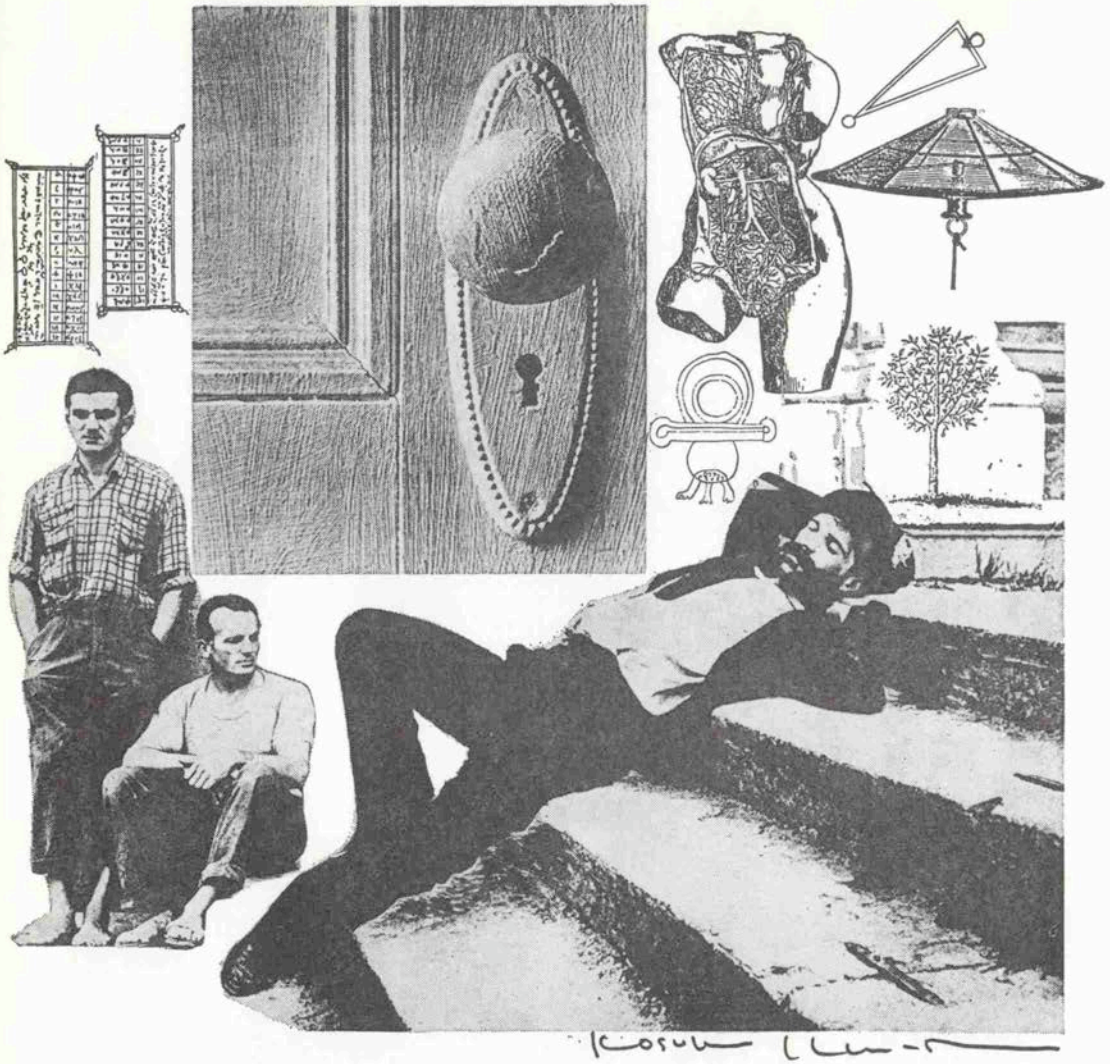
ぼくは踵をかえし、うなだれて再び革の扉を手にする。外に出ると、黒い髪の少女がぼくを待っている。だが、ぼくはもう何も買いたくないし、誰にも会いたくない。そうすることが可能かどうか分らないが、ぼくは黙って少女の前を通りすぎようとした。すると少女はぼくに駆け寄ってきて、顔一杯に笑みを浮かべた。そんなに放心したような笑顔を、これまでぼくは見たことが無かったので、おもわず涙ぐんでしまったが、凍りついたぼくの顔は動かない。彼女の顔も、ランブラス通りの風景の一部分として、町並みに張り付いて見える。だからぼくは、彼女を振り切る訳でもなく、慰める訳でもなく、まったく見も知らぬ人を見過ごすように歩く。驚いた彼女の顔が貝殻のように剝げてゆくのが、視界の隅から去ってゆく。だが、その残像は眼の隅に張りついて、いつまでもついてくる。

人の波は、きわめて不規則に道を流れている。ある時は、横に連なって手を繋ぎ歌をうたい、ある時は、不必要に重なって押しあいをする。かと思うと、群集は急にとぎれ、艶やかな歩道が湖面のように人並を映し出す。空白な時間が歩道に流れ、今度は脅えきった群集のごとき一団が近づいてくる。一団の中心には、なにやら大変な関心事があるらしく、彼らは首筋を揃えて何重にも円陣を重ね、その人垣を乗り越えようとして飛び掛かる者、その後で飛び上がっては内部を覗き見ようとする者、それらすべての人々が、その中心の静かな移動につれて、足をもつれさせながら、横に歩いたり、あとずさりする。その中心に位置するものの正体は、足並に隠れてよく見えないが、何やら人が一人、倒れこんだまま地面を這っているらしい。その奇妙な行為者に対して、人々の意見は真っ二つに割れている。一人の青年が駆けよって抱き起こしにかかると、横から邪険に突き飛ばされ、さらに尻を蹴飛ばされながら、その一団の外に弾き出されている。その横では、激しく罵り合いをするおかみさん同志が、互いに空を見上げ、胸に十字を切りながら、しきりに泣いている。それら騒騒しい取り巻きにはまったく無関心のまま、倒れこんだ男は蝸牛の姿勢で地面を這っている。もうすでに、その姿でかなりの距離を這ったらしく、肘と膝にはタオルを巻きつけてはいるが、それも最早すりきれて、幾筋もの血の航跡が残っている。その血の跡にも人々は駆け寄って跪き、指で血を拭い、自らの頬になすり付けながら、大地に接吻する。のたうつ男は背中に背嚢を縛り付け、人々の差し出すパンと水には目もくれず、時々顔を空に向け、苦痛に震えながら、自ら仕掛けた受難の姿勢により、何かを証明しようとしている。それは一見、限りない単調さへの挑戦のように見えるが、その一団となった取り巻き連中の取り乱した姿勢との滑稽な対比をよく観察すると、実は、彼が挑戦しているのは、あわただしく地上を駆けまわる人間の姿勢、歩きまわることによって、かえって救われようもなく閉じ込められる人間生活の平盤さのように思われる。事実、人間どもは、かくも大勢で彼をとり囲みながら、彼ら自身の方が動きもとれない程に彼の虜になっているのだから。血の巡礼者の気も遠くなる程ゆっくりとした歩行の跡には、謎めいた文字が血に描かれている。それにしても、その文字を意味ありげに跨ぎながら歌をうたい、飛び跳ねながらの遊戯に熱中する子供たちの姿は不気味だ。異様な程に規則正しく、円舞する姿からは子供らしい陽気さがぬけ落ち、そのためそれは、ぎこちない動作で舞い狂う、年老いた侏儒たちの集団に見える。歌の文句は定かではないが、きわめて調子はずれの童謡は、この地方独特の節廻しで、それでも次のよう

に聞きとれるのだ。〈白い杖を見つけたら、人は止まって道をあけ、優しいぼくらは手を貸しましょう。聖フランシスコのお導き。盲人のお坊さんはサンチャゴへの道を知っている。

白い杖が鳴ったなら、人は止まってまわれ右、優しい声を聞きましょう。聖フランシスコのおみちびき。盲目のお坊さんはアラゴンへの道を知っている。

白い杖の差すところ、猫も鼠も喧嘩をやめて、静かに



行く手を見守りましょう。聖フランシスコのおみちびき、盲目のお坊さんの行く手には、必ず奇蹟が待っている。〉

すでに夕陽が子供たちから長い影を引っ張っている。長い影との対比から、子供たちの身長は奇妙に縮んで見える。赤い太陽は、ランブラス通りの延長線に沈みかけ、その下からは真黒な針のような尖塔が、太陽を突き刺そうとしている。

再びランブラス通りは夜のにぎわいを増してきている。店々にはネオンが点りだし、ショウ・ウィンドウにも光が入る。それら人工的な光の量が、空の明かりと均衡を保つと、道行く人々の顔は、街の薄闇の中に浮かんでいるように見える。それは風船のように空気中を漂いながら行くあてもなく、港から吹きよせるわずかばかりの風に自由のようなものを感じようとして精一杯だ。ぼくは再びウィンドウショッピングの人込みにまぎれ、この街のにぎわいに自分の顔を忘れ、肩と肩の触れあいに人類の平均体温のようなものを信じようとしている。薄闇が群集の顔を消す。顔のない人々が、夜のカクテル光線の中をくぐりぬけ、突然なにかのはずみで照らし出される顔顔顔が仮面のように剝れやすい代物でしかないことに気付き、立ちどまって恋人の顔、妻の顔、をしげしげ眺め、不可解そうに接吻を試している。ふと立ち止まる、ショウウィンドウにぼくの顔も映る。随分久しぶりに会った日本人の顔だ。ショウウィンドウの奥からは人声が聞こえ、これもまた顔のない店の主人と一人の客の空しい会話だ。だが店の看板はでかでかと〈目的〉と書かれている。〈それで、どんな目的がいるのかね。〉〈人生の目的だよ。〉〈そりゃ、分っとる。ここに来る客は皆そう言って私を困らせるんだ。もっと具体的に言って下さいよ。色だとか、柄だとか、サイズとかをはっきり。〉〈そういうことがぜんぜん自分で分らないから、ここに来たのに、もう、いやんなるなあ。いい店だと聞いて来たのに、いやんなるなあ。〉〈本当にそんなものがあなたにいるんですか。お客さん。〉〈いるから買いにきたんですよ。はっきり言ってしまえば、ぼくの人生には目的がなくて、手段ばかりなんですよ。つまりぼくは、バルセローナ大学を首席で出たし、いや信じてくれないかもしれないけどそうなんですよ。そして今は、国税庁の課長なんです。まだ三十一才ですよ。したがって、ぼくの生活はこの上なく安定していて、その手段に於ては万全の能力をかねそなえていると思うんです。ところが、最近、人生の目的についてノイローゼになっているのですよ。それもこの店がテレビに流しているコマーシャルのせいですよ。あのいまいましい例のコマーシャルですよ、原因は。〉〈と言いますとどんな文句でしたかね。〉〈目的ノナイ人生ハ、ムナシイ人生ダ。手段ダケノ人生ダ。内臓ノナイ筋肉ダケノ人生ダ。筋肉ダケノ兵隊サン、ゴクロウサンっていうやつですよ。……〉

一日中歩きまわった挙句の果てに、下らない会話を聞いてしまい、ぼくはそそくさと食事を済ませてホテルに戻ることにした。ホテルのサロンには、またしても誰も居なかった。港を見ると、港面のなめらかな闇の肌は、わずかばかりの息をして眠る人の腹のように揺らめいて、夜空の、星もない月もない淋しさを精一杯掻き集めて、空ろで重たげな半透明の幕になり、永遠に底のない真暗な闇の底を見せているのだ。ぼくは闇のシーツに顔を伏せ、闇の底を覗く姿勢のまま、死ぬように眠れたら良いと思う。眠る前には顔を外し、名前を消し、闇のように見えないものになり、静かに音もなく半透明の夜の海面に吸い込まれるように沈み込み、未だ名付け得ぬもの、生まれ得ぬもの、それら無名のものと死者のように添い寝して、朝も知らずに熟睡し、再び訪れる固有の朝など、カレンダーを引きちぎるように、窓枠から外してやる。そして、もし目が覚めた時にはアラゴンへ行こう。何時でもよい。誰に起こされるのでもなく、朝に起こされるのでもなく、ぼく自身の生命力が目覚める時にはアラゴンへ行こう。

（つづく）

海外の文化を訪ねる旅 AAT

● 地域文化のネットワーク
月刊 **旅行アサヒ**

創刊記念2大企画
ツアー参加者募集中

●日中友好 孫文の生家を訪ねる旅

〈香港・マカオ・中国中山県孫文中山故居〉

4日間 / 愛読者特別価格109,800円

出発日⇨5月23日(金)

中国では、このたびポルトガル領マカオとの国境が三十年ぶりに解禁されました。そこで今回は、香港からフェリーでマカオに入境し、陸路中国本土へという初めてのコース。孫文ゆかりの地を訪ね、清朝時代の町並を散策し、唐家庭園を眺めながら中国料理を。香港・マカオでの宿泊・観光も。

日程	内容	行動予定
①	新東京(成田)発 香港着	ジェット機で空路香港へ
②	香港滞在	午前：香港島観光 午後：自由行動
③	香港滞在	終日中国中山県珠海・マカオツアー
④	香港発(午前又は午後) 新東京(成田)着	ホテルにて朝食 一路帰国の途へ

●ヨーロッパ文化の源泉を訪ねる旅

〈ローマ・フローレンス・ベニス・ジュネーブ・パリ〉

13日間 / 愛読者特別価格378,000円

出発日⇨5月17日(土)

カンツォーネとイタリア料理でローマの夜をお楽しみいただいた後は、ルネッサンスの香り高いフローレンス。美しい水の都ベニスでは夜のゴンドラ遊び。白銀のモンブランに登り、花のパリへ。

日程	内容	行動予定
①(土)	成田発	出国手続後搭乗
②(日)	ローマ着	午後：市内観光
③(月)	ローマ滞在	終日自由行動
④(火)	ローマ発(午前) フローレンス着(午前)	朝食後フローレンスへ 午後：市内観光
⑤(水)	フローレンス発(午前) ベニス着(午前)	朝食後ベニスへ 午後：観光
⑥(木)	ベニス滞在	終日自由行動
⑦(金)	ベニス発(午前) ジュネーブ着(午後)	朝食後列車にてジュネーブへ
⑧(土)	ジュネーブ滞在	終日自由行動
⑨(日)	ジュネーブ発(午前) パリ着(午後)	朝食後航空機にてパリへ 午後：市内観光
⑩(月)	パリ滞在	終日自由行動
⑪(火)	パリ滞在	終日自由行動
⑫(水)	パリ発 8:05	朝食後空港へ 一路帰国の途へ
⑬(木)	成田着 14:05	諸手続後解散

共同企画/月刊旅行アサヒ・朝日海外旅行

● お問い合わせ、お申し込みは——
神戸市生田区東町113の1 大神ビル7F 月刊神戸っ子内
旅行アサヒ係 TEL.(078)331—2246

—飲食店は清潔第一！—

ねずみ、ゴキブリ撃滅大作戦！

● これからのお店の衛生管理はトータルサニティション（殺菌、防カビ、防殺虫、防ねずみ施工）の時代です。
● 店舗、住宅を微生物（細菌、黴）微細害虫（ダニ、コナダニ類）、衛生害虫（ゴキブリ、ねずみ）、建物害虫（シロアリ、木喰虫）、衣類害虫（イガ、カツオブシムシ）からお守りします。
● 書籍、骨董品、段通、毛皮製品等の保管についてはご相談ください。(相談無料)

三洋化工株式会社
神戸市生田区中山手通1丁目75
電話(391)3195(代)・(331)6619・(321)2727

●第4回神戸女流文学賞受賞作品

影と棲む 4

田口佳子

絵／田中徳喜

店での苑子は、当初から受けがよかった。

どこかで客を突き放す用心深さが、年を感じさせないベビーフェイスとともに、一つの愛嬌になって、べたついたサービスの女たちの中で却って目立つ存在になった。

「苑ちゃんはパパっ子だからねえ。よほどの男性でないとだめなのよ、何しろ、相手は苑ちゃんと三十年のおつき合いで飽きも飽かれもしなかった仲の人なんだから、最強のライバルだわね」

ママが世馴れた芝居っ気たっぷりの声で、更に関心を煽り立てるようにいうと、客は皆一様に、おどけた驚きの表情でその場はやわらかな笑いにほぐれた。中には、真顔でううむと苑子の顔に見入るのもいた。

「そりゃ、何とかコンプレックスって奴だ。あれは男と寝ても感じないそうだね、本当かい？　苑ちゃん」

などと、つけつけと顔に眺め入られて、まさか、と笑って返しながら彼女は心のどこかでたたらを踏んでたじろいだ。

久しぶりに時間がゆっくりとれて、デパート内を気ままに歩き回りながら、目が行くのは男物ばかりなのに気がついた。

父が身につける物はすべて苑子が選んでいた。たまに母が買ったネクタイやポロシャツは、いつまでも洋服箪笥の中で新品同様であった。人ごみに揉まれていると、疲労感と喉の乾きを覚えた。胸も腋の下も汗ばんでいる。

喫茶室に入って、レモンスカッシュを注文した。ガラスで仕切られたコーナーは、他に初老の母親らしい女と幼児をつれた自分と同じくらいの年齢の女が飲み物を前にして屈託なげなお喋りに興じているだけである。

苑子は行き交う人をぼんやりと見ていた。

次々と移る視線が、男性に片寄るのを自分でも意識している。

それは、父の年代の人であったり、昌男と同年らしい人であったりする。昌男はこの頃の苑子の生活の中で、こういうぽつんとした滴みたいな空白の時間に姿を現わすことがあった。

思い出すという優しい時間の皺よせではなくて、いきなり、ぽこんと浮き出るのだった。もともと、激しく背き合い憎み合って争いの果てに別れたというのではない。

愛しきることも、憎みきることもできず、お互いが歯に何か挟まった状態のまま、紐がほぐれるようにして別れてしまった。

運ばれて来たレモンスカッシュを、ストローでかきまぜると、半透明な液の中をレモンの種がゆらゆらと沈んで行く。

種が揺れながら、グラスの底にゆっくりと定着するのを苑子はじっとみつめていた。

昌男の精子と自分の卵子が、いのちとして子宮に宿った時のかたちといえば、こんなものではなかっただろうか。

軽いレモンの種は、水の抵抗をくぐってゆらめきながら、どこか危っかしさに傾いて下りて行く。

自分たちのいのちの種も、ためらいながら宿ったように思われてならなかった。

少なくとも、レモンの種に対する水に似た抵抗感は自分の側にはあった筈である。

結合した自分が、昌男を愛していたといいきれる自信がなかったから、母にあんな嘘の強がりをいったのだということを苑子は知っている。心から、彼の子を産みたいと思っていた訳ではなかった。

彼女は昌男と体を合わせても、加えられる力以外、何も感じなかった。

「まるで、木で彫った人形みたいだ」

彼は途方に暮れたような声で苑子から離れた。彼の体が、うっすらと汗ばむことはあっても、苑子の白い肌はひんやりと陶器のように静かに冷えたままであった。

「どうしたのかしら」

彼女は不安そうに、項を落としてシーツの上に散らばったヘアピンを拾い集めながらためいきをついた。昌男が嫌いなのではなかった。嫌いなら結婚などする筈がなかった。その思いが苑子自身をも、焦燥と不安に駈り立てた。

昼間、彼の物を濯ぎ、彼のために調理し、彼の帰りを待って、夜になると少しも疲れていなくても彼女の四肢は眠りこんだ。

度重なって、相手から詰るような不満の色をぶつけられると、彼女も昂ぶって追いつめられた感じで、

「あなたのお母さんのせいよ！」

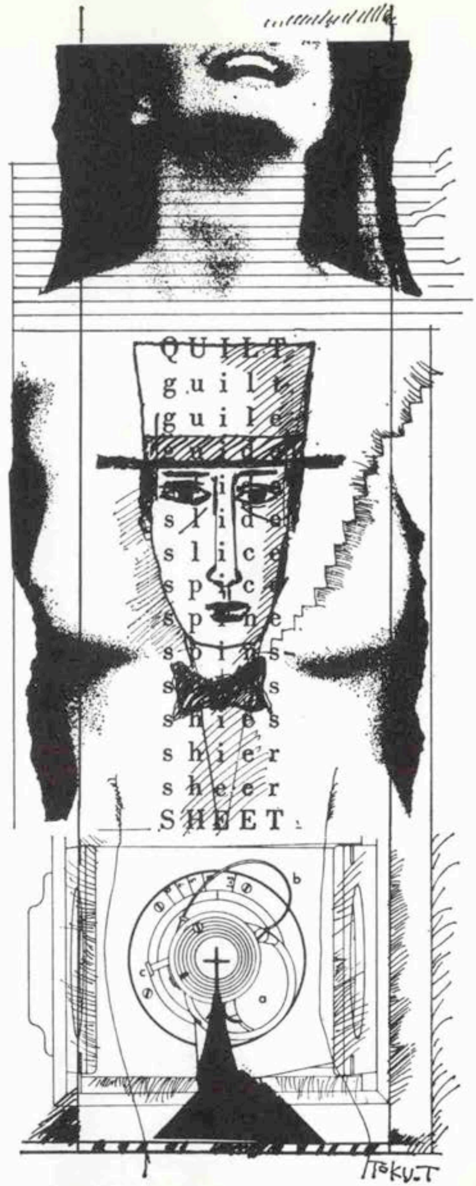
と口走ってしまった。

その夜、彼女は暗がりの中で何かを踏んだ。

柔らかくて冷たくて、かしゃり…と足裏に触れたもの

…潰れた感触が気味わるかった。

灯をつけてみると、床の間の水盤に活けられた椿が散って、その一つが踏み潰されていた。椿は庭に何種類か植えられており、姑の好きな花だった。水盤のも姑が活けたものだった。足裏で冷たく崩れた花弁の、しめやかな感触は、姑のまなざしを思わせた。



苑子は花を抜き取り、庭へ投げ捨てた。

今もって、椿のことにあざとい紅の色は好きになれない。

喫茶室を出て、エレベーターに乗ろうとして歩いて行くと、階段の踊り場の赤電話が目に入った。小さな男の子を連れた若い女が、沢山の買物包みを持ったまま、体を傾けるようにして受話器に語りかけていた。

男の子は女の手を両手で持って揺さぶった。

あやすように、宥めるように女はにっと睨んで荷物を持った手を更に子供に縋られながら、喋りつづける。

とうとう彼女は、男の子に負けてじゃあ…と受話器を置いた。

苑子は小さな迷いで足を止めた。ダイヤルをみつめていたが、エレベーターが停まったらしく人垣が崩れはじめたのを見て踵を返した。赤電話は人の陰ですぐ見えなくなり、彼女は人いきれに巻きこまれてエレベーターに乗った。鼻先すれすれに、ドアが閉まった。

休日は月に二度だった。

時どき、父が仕事の都合で前日から来て泊まって行くことがあった。時によっては、小さな書類や辞書を抱えて来ることもあった。

アパートに移った当時は、淋しいだろうからといわれると、本当に淋しい気がして安堵したように枕を並べた。

娘の頃は、父は一人で自分の居間で寝ており、苑子は母と並んで寝たが、一度、父の側で眠ったことがある。高校に入って間なしの頃だった。風邪がこじれて高い熱が出た夜、苑子は母の看病を拒んだ。

いつ、目が覚めてもじいっと上から自分をみつめているよく光る大きな母の目があって、熱で弱っている苑子にはそれがひどく疲れを感じさせた。普通なら心身の弱った娘にとって、母親の凝視は心強い精神的な保護を意味する筈だったが、その時の苑子には訳のわからぬ不安と嫌悪感がつのった。

何かの状態を見極めようとする時、母の瞳は大きく拡がり、褐色の透明度を深くする。

ガラス玉みたいな目はこちらに、深く食いこんで離れない。それがいやだった。

熱で時どき混濁した意識の間を縫って、母の呟くような読経の声が聞こえた。

香の煙が、洟でつまっているはずの鼻孔を更にぴったりと封じるような気がする。

木魚の音が弱った体の皮膚を打った。本当に音って痛いものだと苑子はその時に思った。

それが、夢なのか現実なのか、わからずに苑子は呻いた。自分が、どんどん違う次元の世界にひっぱりこまれて行くような、心もとない墜落感が、寸断された意識を危うく繋ぐ。

うとうととすることで、近寄っては遠のく母のきれめのない声は、小さな無数の虫が飛ぶ羽音に似ていた。

銀色の透き通った小さな羽をふるわせて、触角をちらちらさせた、どんな種類ともわからぬ虫が夥しい数で十重二十重に苑子を襲いとり巻く。払いのけても、払いのけても息苦しさはつのり、彼女は何度か父を呼んだ。

気がついた時、母はいなくてパジャマにカーデガンをひっかけた父が、額に冷たいタオルをのせてくれるところだった。

「お母さんも疲れたようだから交代したよ。ずっといるから心配しないで眠りなさい」

安堵して眠った苑子は夢を見た。

明るい丘の上に、ぽつんと教会が建っている。丘の麓から教会の入口まで、白くて長い石段がつづいていた。

ウェディングドレスの裾をつまみ上げた苑子が、モーニング姿の男に腕を預けて石段を上がって行く。

男はやさしく苑子に何か話しかけるが、何をいっているのかわからない。苑子の胸ははちきれそうな喜びで、弾んで息苦しいほどだった。

暖かな光を掻き集めて、自分だけに注がれるような…

よい香りが自分の足もとからだけ立ちのぼってくるような…。

幸せな気分に包まれて、うっとりと見上げると、腕を貸してくれている男の顔はのっぺらぼうで目も鼻もなかった。

それが不思議に少しも怖くも不気味でもなくて、みつめているとゆるやかな天然ウエーブの豊かな髪の縁どりの下で、聰明そうな広い額から眉・眼・鼻・唇と一つずつ、パズルの文字を嵌めこむようにして男の顔になった。

苑子は安心して微笑む。男の顔は若いが、間違いなく父であった。父の顔をした若い男は、教会の入口の前で立ち止まると、身をかがめて唇で苑子の唇を包んだ。

温かでやわらかな、肌理のこまかな唇の感触に目を開くと、自分をみつめている父の眼と出会った。

彼女は感覚の半分が、まだ夢に浸ったままの状態で気恥ずかしく微笑んだ。

熱とは別の熱さが苑子を包みこんでいた。

翌日、熱が下がり軽い食事をとりながら、苑子は夢の話を母にして聞かせた。

「私、夢の中で結婚したの。丘の上に建ってる教会でね、白い長い石段を上がったわ」

母は眉を寄せた。彼女は予言と同様、夢占いが好きだった。夢は五臓六腑の疲れではなく、人間の誰もが本能の裡にひそめている声であり、一つの天啓だという信念をもっていた。どこから得た方法なのか、母が独自の分析で喜んだり悲しんだりするのを日頃から見なれていた苑子は、意地のわるい興味を抱いた。

「夢の中で私、誰と結婚したと思う？」

母の褐色の眼は、いつものよう

に苑子にぴたりと吸いついてこなかった。
彼女は焦点の決まらぬ視線を泳がせながら、苑子の問いには答えずにいった。
「体の具合のわるい時の、結婚式の夢はよくないのよ、むしろお葬式の方がいいの」
「でも、私は幸せだったわ、あんな風な幸せがきっと本当にくるんだと思うわ」
とうとう、母は苑子の夢の中の結婚相手には関心を示さずじまいであった。
モーニング姿の花婿が、明らかに他人の体をもちながら、父親の顔をしていたことを母は知らなかった。
ましてや、苑子の唇に残った魅惑的な感触など、いくら神経を集中しても、母にはわかりっこないのだと思うと彼女は満足した。
結婚してから、昌男と交渉をもち、彼の側で眠りながらもう一度、あの夢を見て疼くような快感と幸福感に浸りたいと思ったが二度と見ることはなかった。
あの鮮烈な思い、秘密めいたよろこびに比べると、夫との間に実際に味わう感覚は、どこか水増しされたような鈍いものにしか感じられないのだった。
父がアパートに泊まりにくると、目ざとい近所の主婦たちが、愛想と好奇心を織り混ぜてさも親しそうに声をかける。
「いいわねえ、よっぽどの秘蔵っ子だったのでしょう、でもお母さんはちっともこられないのね」
母親が泊まりにくるのならわからぬではないが、一度も姿を現わさず、父がくるのは不自然には違いなかった。
それも、初めの頃は一人暮らしを案じられると、つい甘える気分になっていたのがこの頃の彼女は何となく疎ましくなっている。
父の衣服を扱うと、ふうっとかすかだが、沁みついた線香の匂いがする。
それが最近、特に鼻につくようになっていた。母は苑子が一度、家に帰ってから時どき電話をしてくるようになった。
家にいても、あまり話し合うことのない母と娘であった。元気?といったあと、苑子は黙りこんでしまう。
「いえ、別に何でもないんだけどね。どうしているかと思って」
あまり情のこもらぬ声で、うだうだと近所の噂話などがつづく。今の苑子にはまったく関わりのないことなので、ついいらいらして、「忙しいの、またね」とこちらから切ってしまったりする。結婚に破れた娘が、水商売で働きながらの一人住居を訪ねる勇気も情愛もない母は、「ええ、あの娘も幸せに行ってましてね」などと、相変らずの見栄を張って生きているに違いなかった。
時たま、自分からかけてくる電話が、年齢からくる気弱さを意味するのか、苑子にはよくわからない。切ろうとすると、声色を変え
「昌男さんに会ったりすることはない?」と訊ねる。
「会うわけないでしょう?どうしてそう同じことをいうの?しつこいわね」
声を荒らげると、長い鼻息が聞こえて、
「そういう感じがするからですよ」
という。甲高い地声の人が、一オクターブ下げて、ねっとりと絡むように、そういう感じがするというのは聞き流そうとしても苑子にまとわりついてしまうのだった。
そのいい方は、臆測や懸念とは違って、いつもの予感を確かめようとする気配が濃かった。苑子は不快と、反撥をこめかみに、ぴんぴん感じてしまう。
そんな時の母は、苑子から見ると自分の勘と、現実が符合することだけを気にしているようにすら見える。起こるかもしれない事柄が、実際に現実化した時のことは、二の次になってしまっているのだ。それを知りながら、苑子の方は自分の意志より母の予言からなる空想力の方に領分を押し拡げてしまうのだった。それがじわじわと彼女を圧迫する。
（つづく）